

平成 25 年度

給食管理のためのスキルアップ研修会

＜子どもの食事指導・支援プログラム 活用報告書＞



公益社団法人 日本栄養士会

学校健康教育事業部

目次

はじめに	1
------	---

平成 25 年度子どもの食事指導・支援プログラム 活用報告書

子どもの食事指導・支援プログラム 活用報告書	2
------------------------	---

スキルアップ研修会受講後の取り組み

○スキルアップ研修会受講後の取り組み その①

新潟市教育委員会	16
松山市教育委員会	20
仙台市教育委員会	22

○スキルアップ研修会受講後の取り組み その②

プログラム開発者と実践活用者の対談	24
-------------------	----

○スキルアップ研修会受講後の取り組み その③

参加企業（賛助会員）からの手紙	27
-----------------	----

今後の展開	28
-------	----

名簿	29
----	----

はじめに

平成 20 年 6 月に、学校給食法の大幅な改定が行われ、適切な栄養の摂取における健康の保持増進を図ること等が学校給食の目標に加われました。そして、学校給食の適切な実施のために必要な事項についてまとめた基準「学校給食実施基準」が定められ、学校給食の栄養内容の基準として、児童生徒一人一回当たりの学校給食摂取基準が示されました。

学校給食摂取基準については、従来の平均栄養所要量の基準の栄養価の一点を示す考え方から、全国的な平均値のほか範囲や目標値を示すことにより、個々の健康及び生活活動等の実態並びに地域の実情等に十分配慮し、弾力的に運用することを強調しています。

平成 25 年 1 月に改訂された学校給食摂取基準の策定にあたっては、厚生労働省が定める「日本人の食事摂取基準（2010 年版）」を参考とし、その考え方を踏まえるとともに、文部科学省が平成 19 年度に行った「児童生徒の食生活等の実態調査」や独立行政法人日本スポーツ振興センターが行った「平成 19 年度児童生徒の食事状況等調査」等の結果を勘案し、児童生徒の健康の増進及び食育の推進を図るために望ましい栄養量を算出されたものです。

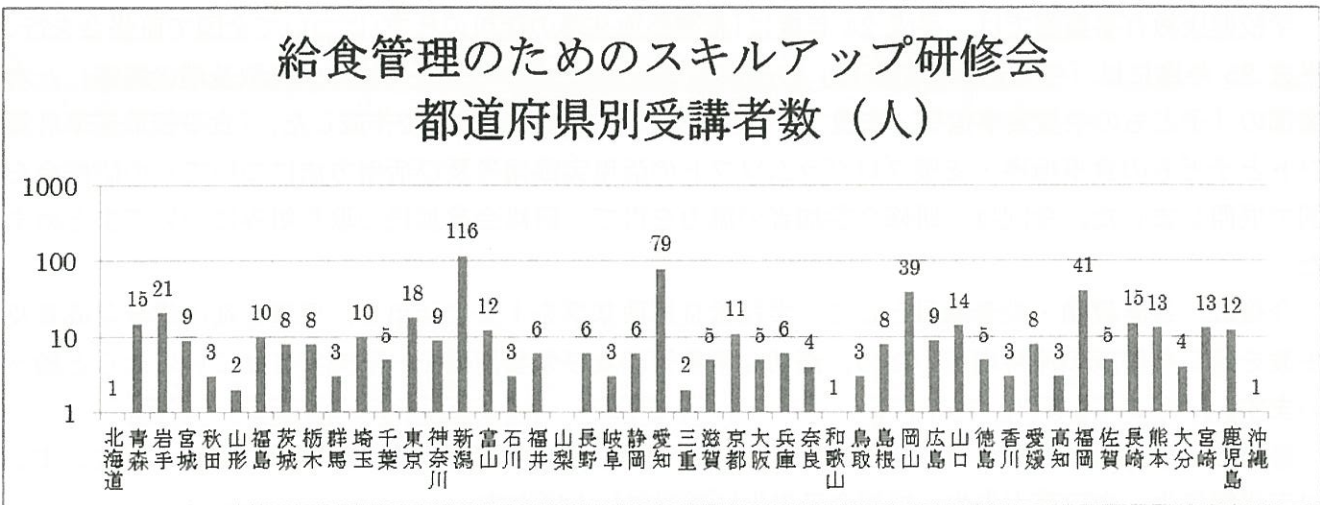
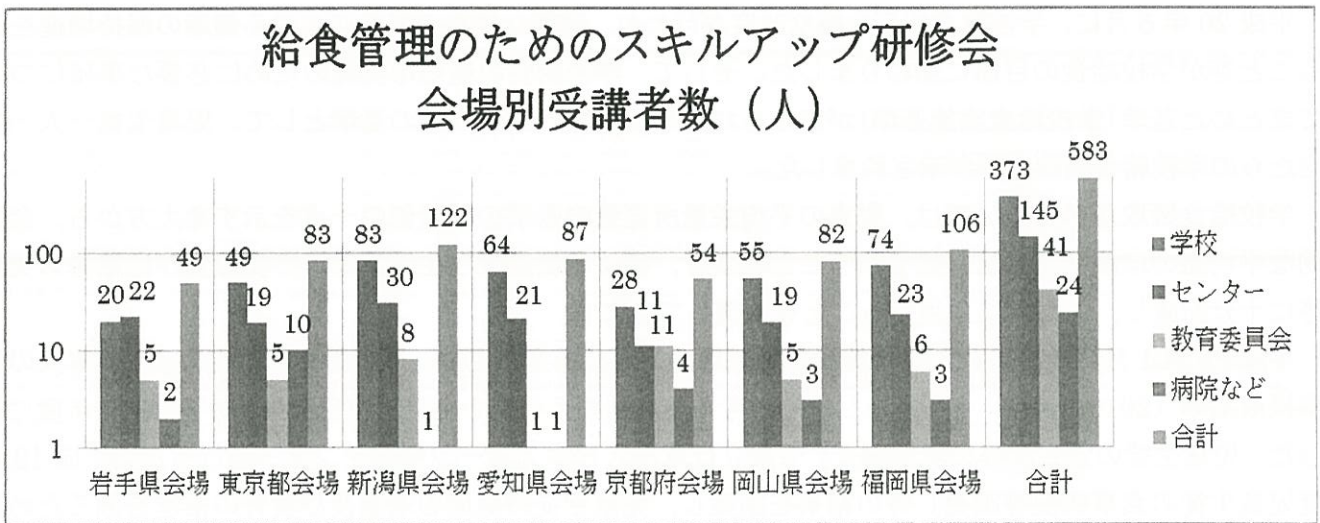
学校健康教育事業部では、平成 24 年度に「食事摂取基準の活用の仕方」について全国で研修会を行い、平成 25 年度には「学校給食摂取基準」の改定及び施行に合わせて、「学校給食摂取基準の解説」と本事業部の「子どもの栄養食事指導・支援プログラム」ワーキング委員会で作成した、「食事摂取基準計算ソフトと子どもの食事指導・支援プログラムソフトの活用実践報告及び活用方法について」の研修会を全国で展開しました。今回は、研修会参加者の協力を得て、研修会参加後の取り組みについてまとめました。

今後は、栄養教諭・栄養職員として、学校給食摂取基準を十分に活用し、児童生徒の健全な成長及び生涯を通じた健康の保持増進のため、適切な栄養管理及び栄養指導を一層充実させていけたらと願っています。

最後に、活用報告書を作成するにあたり、日ごろから多大なご協力やご指導、ご支援くださいました村田光範先生、由田克士先生、杉浦令子先生に感謝申し上げます。

学校健康教育事業部企画運営委員長 柵木 嘉和

給食管理のためのスキルアップ研修会受講者状況について



『給食管理のためのスキルアップ研修会（7会場）』の受講者数は、583人でした。その内、8月報告書対象人数（9月実施の愛知県会場と福岡県会場受講者分193人を除く）は、390人でした。

また、8月報告書提出者数については、9月13日（金）事務局到着分迄とし、それ以降到着分は、改善点および感想について参照させていただきました。12月報告書提出者数については、1月18日（土）事務局到着分迄としました。

〈子どもの食事指導・支援プログラム 活用報告書〉

() 都・道・府・県 勤務先 ()
 名前 () 勤務先電話番号 ()

1. このプログラムを活用しましたか？○印をつけてください。

- A. はい。 () →2. の設問に続けてお答えください。
 B. いいえ。 () →5. の設問にお答えください。

2. どのプログラムを活用しましたか？活用したものに○印をつけてください。(複数回答可)

- A. 「摂取基準算出」 ()
 B. 「子どもの健康管理」 ()
 C. 「食事処方」 ()

3. データ数はどのくらいですか？また、内訳の該当するものに○印をつけてください。
 なお、センター及び複数校勤務の方は、活用した学校の児童・生徒数の合計でお答えください。

入力した児童・生徒数 () 名

- 内訳 全学年 ()
 1部の学年 ()
 抽出児童生徒のみ ()

4. 活用例についてお聞きします。活用したものに○印をつけてください。(複数回答可)

○印	活用例	プログラム	具体的内容
	摂取基準を求めた	A・B・C	
	給食管理に反映させた	A・B・C	
	給食時間の指導に活用した	A・B・C	
	児童・生徒の個別指導を行った	A・B・C	
	家庭との連携として食事指導を行った	A・B・C	
	その他	A・B・C	

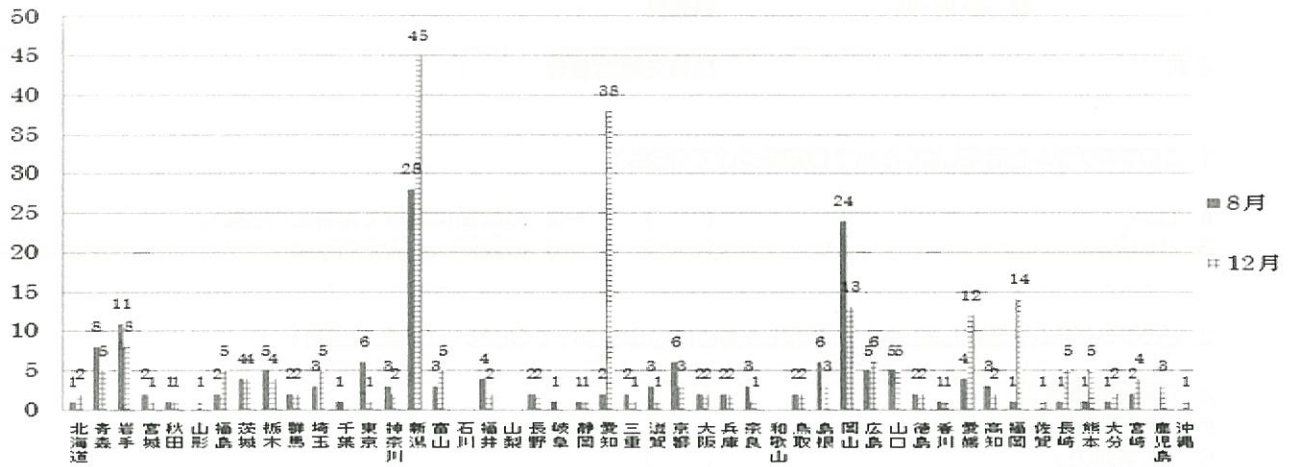
↑ 2. の設問のプログラム記号となります。

5. 活用しての改善点をお書きください。(具体的に)

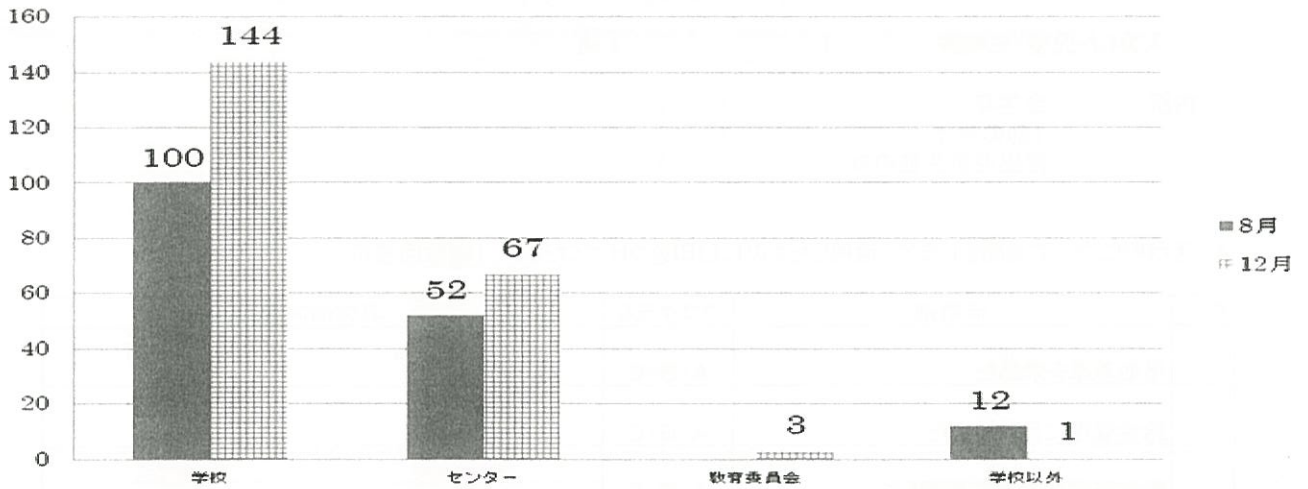
6. 感想

ご協力をありがとうございました。

都道府県別報告書提出者数（人）

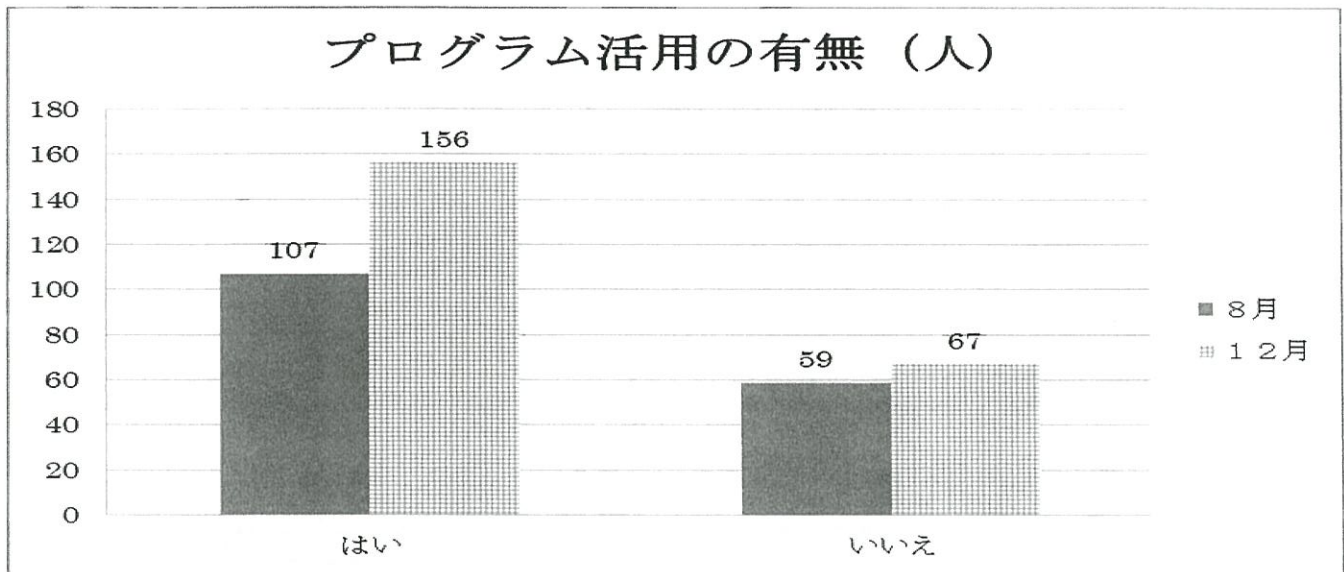


勤務別報告書提出者数（人）

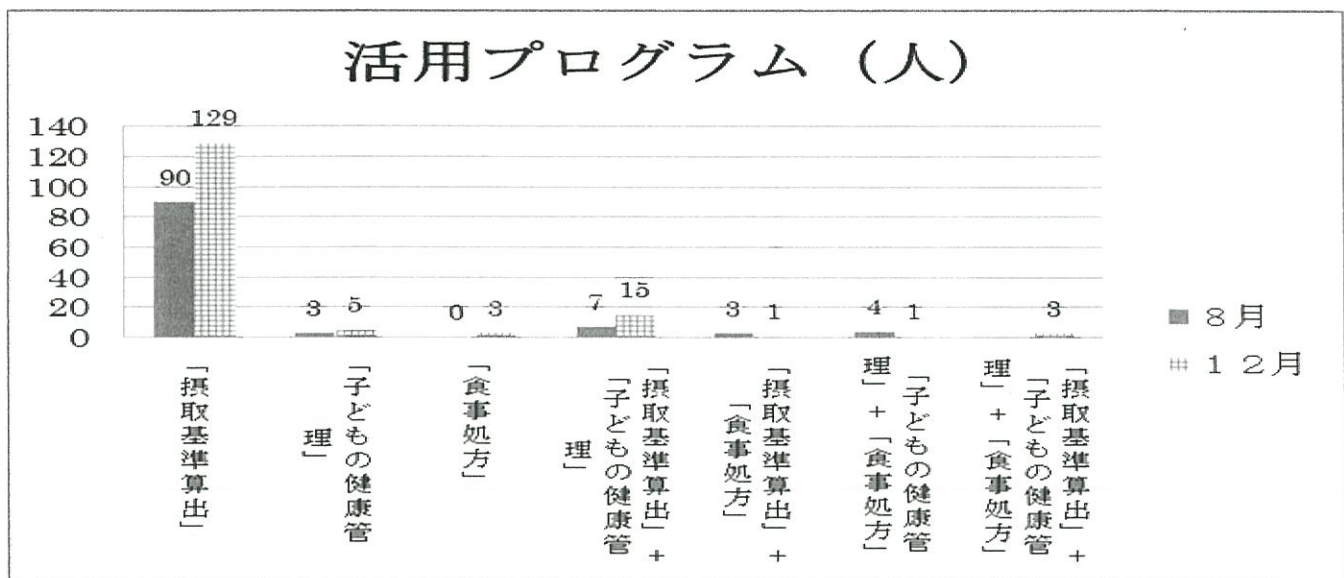


8月と12月の報告書提出者数を比較すると、都道府県別報告書提出者数と勤務別報告書提出者数どちらもグラフのとおり増えました。

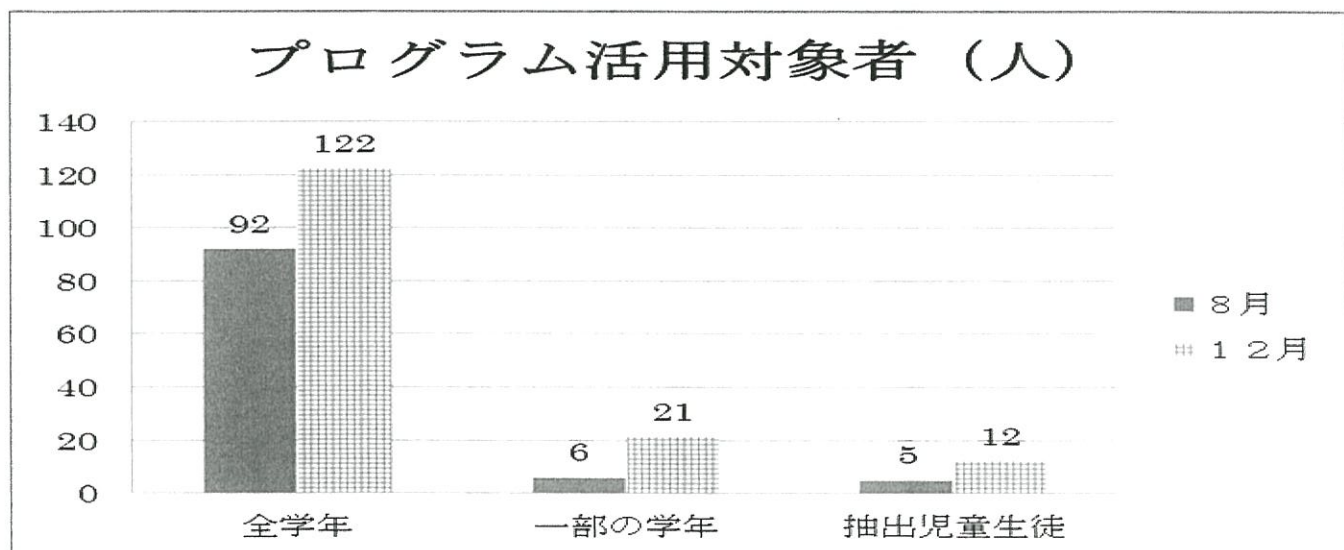
1. このプログラムを活用しましたか？



2. どのプログラムを活用しましたか？

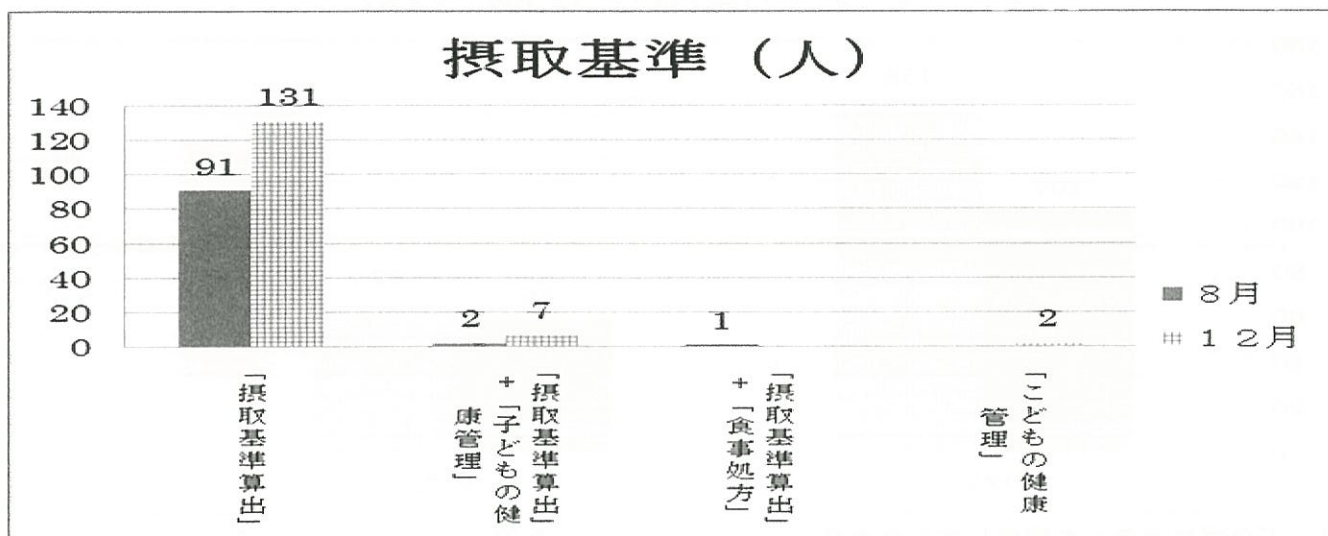


3. データ数はどのくらいですか？また、内訳の該当するものに○印をつけてください。

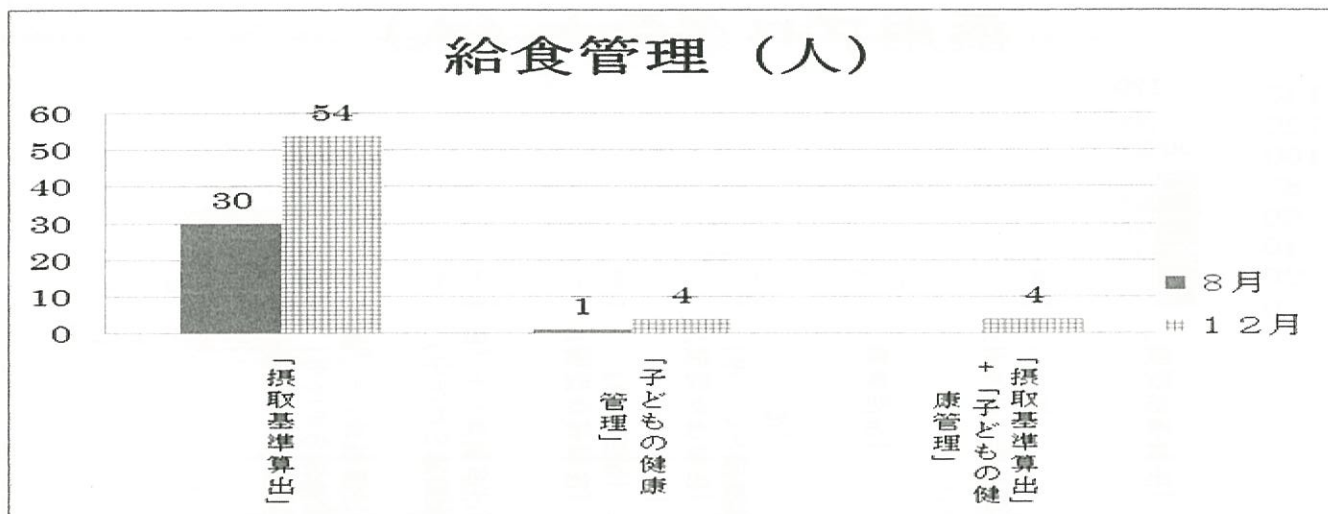


4. 活用例についてお聞きします。

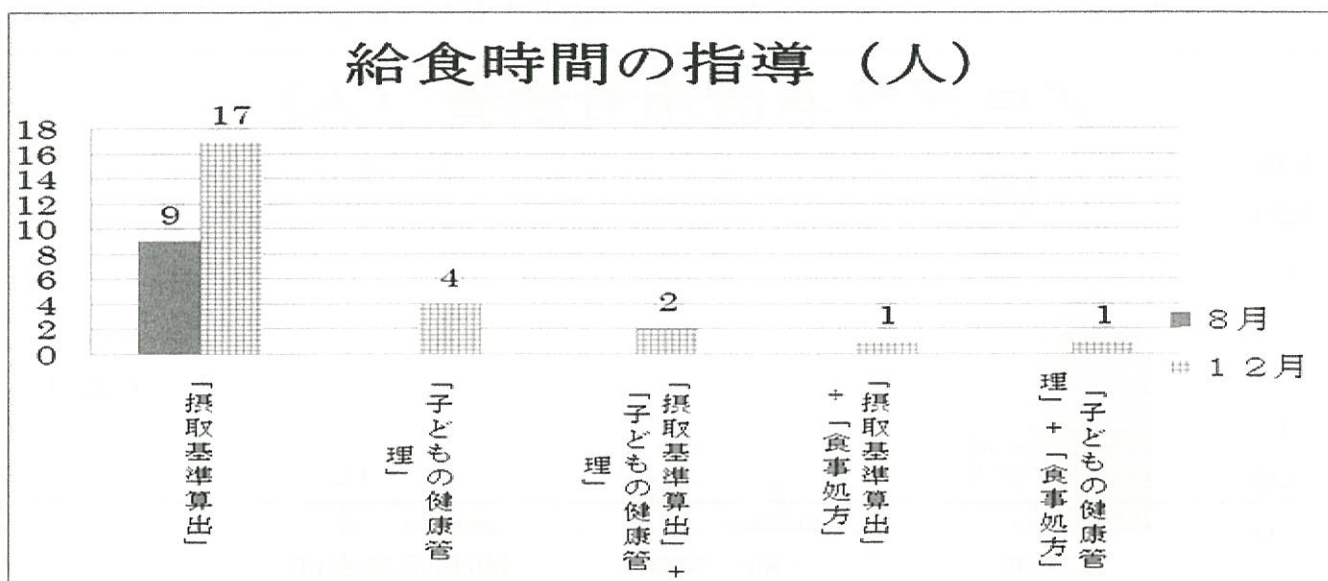
摂取基準を求めた



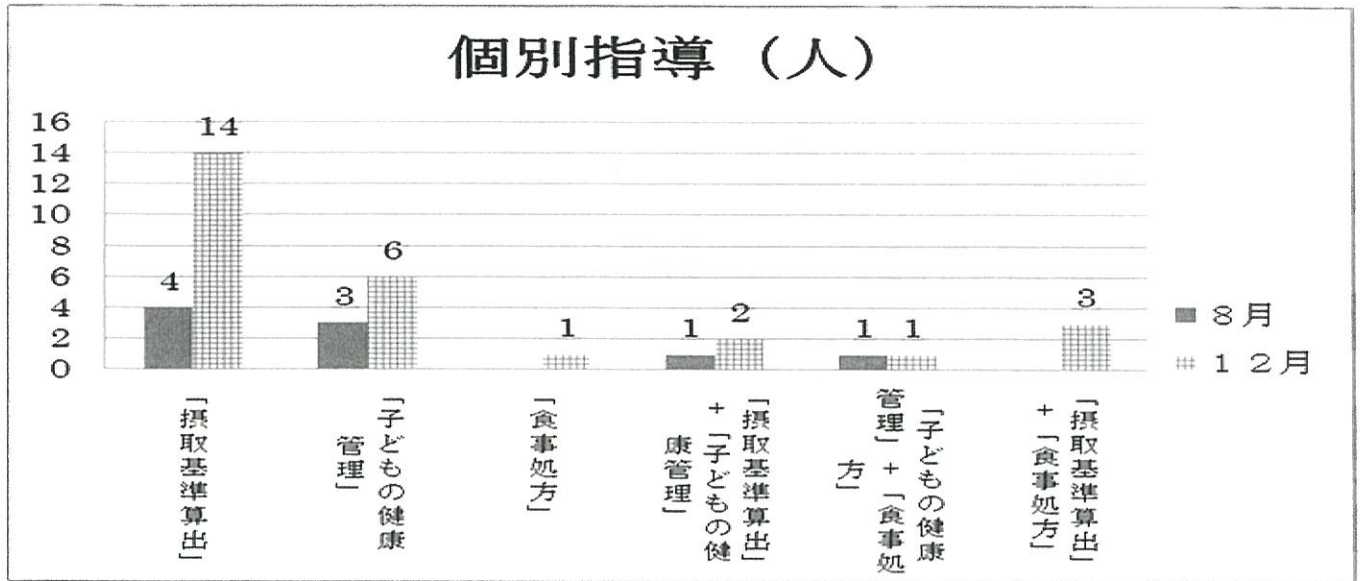
給食管理に反映させた



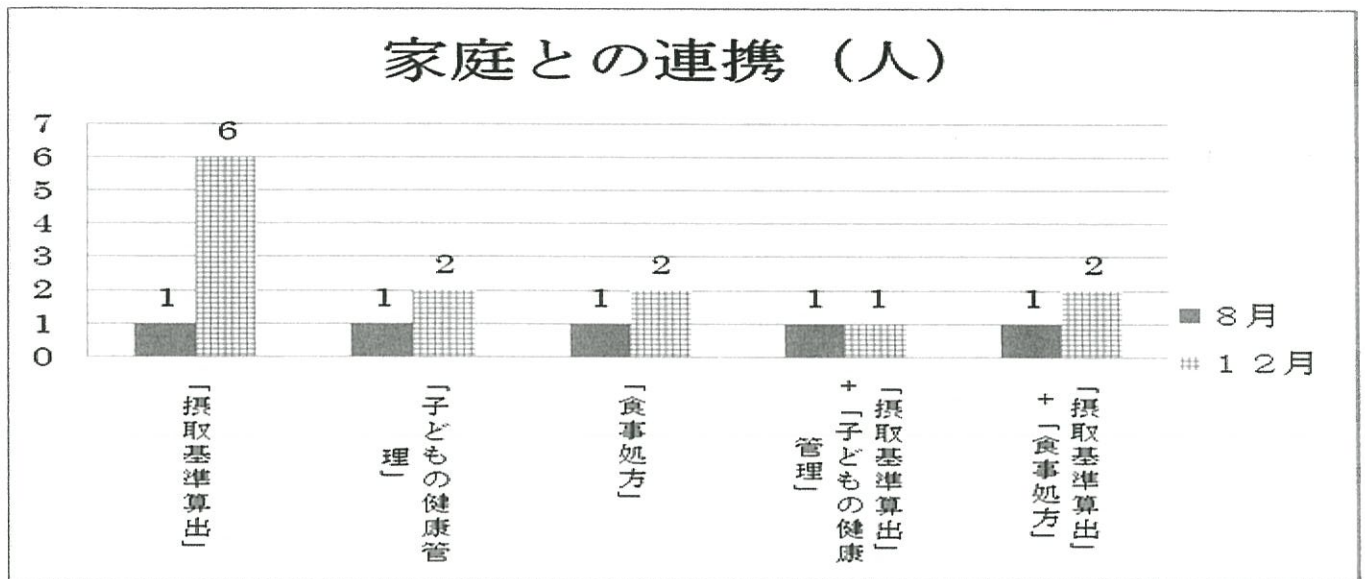
給食時間の指導に活用した



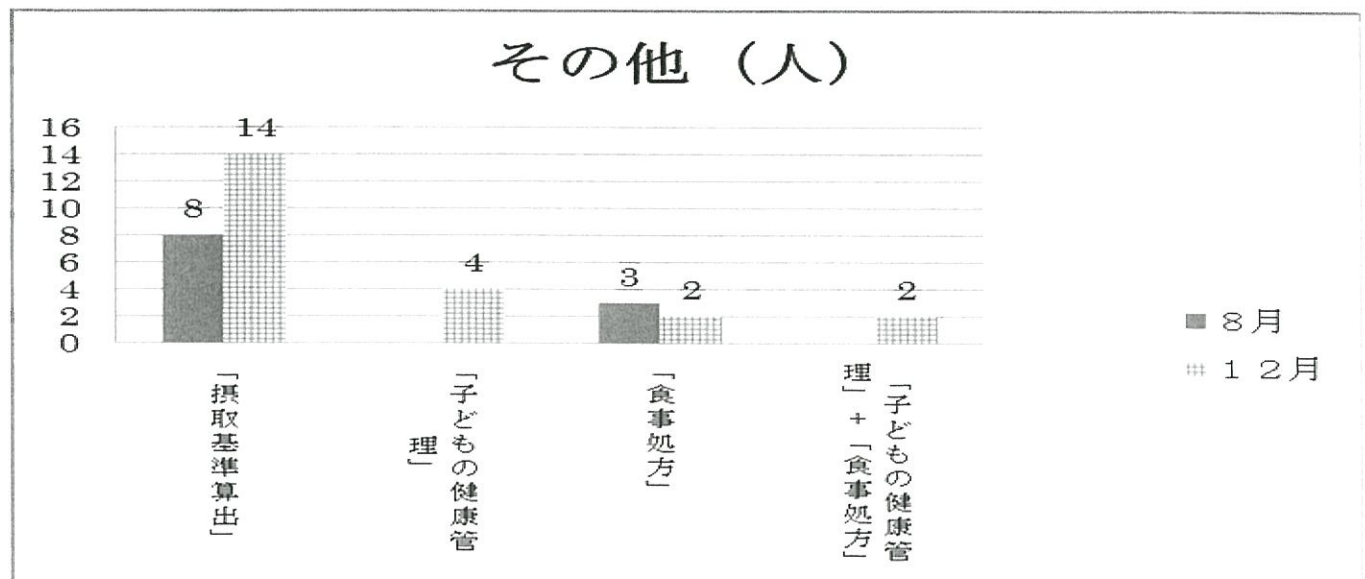
児童・生徒の個別指導を行った



家庭との連携として食事指導を行った



その他



その他の具体的な内容は次のとおりでした。

○「摂取基準算出」

- ・弁当作りの調理実習で自分に合った大きさの弁当箱を用意する指導に使用した。
- ・学会発表の一部に使用した。
- ・残量の多いクラス担任への資料とした。
- ・養護教諭に摂取基準等の資料を配布した。
- ・学級活動でおやつ の指導をする際、肥満度を参考にした。
- ・教職員向けに学年毎の摂取基準を示し、資料を作成した。
- ・保護者宛におたよりを配布しコメントをいただいた。
- ・1学期と3学期の給食量の比較に使用した。
- ・小学校4年生保健の授業資料とした。

○「子どもの健康管理」

- ・所属校の先生方に説明し理解をしていただいている。
- ・各校の養護教諭に、「子どもの健康管理」プログラムをコピーして渡し、子どもの健康管理に活用するよう促した。
- ・小学校6年生に自分の摂らなければならないエネルギー量を算出させた。そのエネルギー量に見合う献立を考えさせた。

○「食事処方」

- ・職員研修時の話題として話をした。
- ・授業に使用した。

○「子どもの健康管理」＋「食事処方」

- ・授業で活用した。

(考察)

報告書提出者数からみたプログラム活用で「はい」と答えた人は、8月が64.5%、12月は70%となり活用の幅が広がっている。

活用プログラムは、「摂取基準算出」が5.2%、その他の活用が4.5%増えている。

「摂取基準算出」をもとにして活用例が増えていることは、望ましい給食管理や個別指導を行うための科学的根拠として有効であると考えられる。

学校給食摂取基準を作成した際のグラフや身長体重成長曲線等は、学級担任や養護教諭をはじめとした教職員への資料提供や授業での活用がある。また、保護者と連携しての子どもへの指導に活かされている。

このプログラムを活用して学校における健康課題を明らかにし、学校関係者や保護者と共通の認識を持って、児童生徒等の健康の保持増進を図りたい。

5. 活用しての改善点をお書きください。(具体的に)

8月および12月の報告書に記載された受講者からの改善要望等について、先生方からご回答をいただきました。こちらに掲載いたします。

<8月>

受講者からの改善要望等	由田先生からのご回答
女子が圧倒的に多い学校なので、中央値からかけはなれてしまう男子が多くなってしまった。そこで、中央値ではなく、平均値から摂取基準を求め、ご飯の量で調整することにした。	示された対応で問題がなければ、これでよいと思います。また、女子のみで中央値もしくは平均値を求めたうえで、男子についての上乗せ量を考慮して個別指導を行うことも可能かと思えます。
度数分布表(グラフ)は、再評価する前の値をカウントできるように変更した。(分布を知るために)	望ましい給与エネルギー目標量を検討するうえで、繰り返しの検討(シミュレーション)を行うことは大事なことです。各回の分布状況をカウントできるようになされたのは、よいお考えであると思えます。
体格差の大きい学校なので、小学部を入力したところ、偏差の関係で基準計算から飛び出たものの人数が多く、基準算出の学年を考える必要があるように思った。	特別支援の学校をご担当なさっているのでしょうか？対象者の推定エネルギー必要量が大きくばらついている場合は、学年ごとあるいは、学年の男女ごとに目標量を設定するなど、無理のない範囲で詳細な対応を取ることが望ましいと考えられます。

<12月>

受講者からの改善要望等	由田先生からのご回答
推定エネルギー必要量から推定量と目標量が決まる たんぱく質、ビタミンB1・B2、食物繊維も同時に算出できるようになっていると より便利になると思えます。	ロジック的には、対応可能ではありますが、現状は、基本となるエネルギー量を適切にしようという趣旨なのでご理解いただきたいと思えます。

<8月>

受講者からの改善要望等	北出先生からのご回答
・EER 算出表で、17歳女の基礎代謝量がIF関数のVLOOKUP検索値からはずれているので、「基礎代謝基準値」から「I×33%」Kcalまでの値が出てこなかった。 ・<再評価について>の中央値からはみだした□Kcal以上の欄が1000Kcal以上だと、文字のサイズの関係で表示が「####」となるので、欄を大きくするか、文字サイズを小さくするとよい。	一点目のご指摘は当方の設定ミスでございました。お詫び申し上げます。E(基礎代謝基準値)、G(身体活動レベル) H(エネルギー蓄積量)の3列において、検索範囲が行ずれていました。修正が必要ですので、なんらかの方法で皆様に周知いたしたいと存じます。 <再評価について>は、A4 1枚に収めつつ、少しでも大きく表示できるようぎりぎりの設定にしたため、ご使用のPCやExcelのバージョンによっては、####(表示不能)となる場合があります。次回の修正時には、設定のフォントを一ポイント小さくしてみます。ご指摘ありがとうございました。

受講者からの改善要望等	北出先生からのご回答
標準偏差からはみだした生徒の氏名や出席番号が別シートに一覧でまとめられるとよい(後日個別指導する関係で)	Excel のフィルター機能を利用し、A30 から V *** (データ入力範囲) までオートフィルターをかけ、再評価 I × 33% の列が空白セルの検索をかけると、集計が可能になります。この設定は、データ入力件数によって、フィルターをかける範囲が違ってくるので、配布させていただくファイルにこの設定はできませんでした。ご了承くださいませ。貴重なご意見をいただきありがとうございます。
個別の指示や対応が求められる児童の数値も色を変えて表示されると参考になると思いました。	<p>肥満度の数値でオートフィルターをかける(+20%以上、-20%以下)、再評価 I × 33% の列が空白セルになっている(対象集団の中で中央値から大きく外れている児童生徒)というのが数値で個別対応が必要かもしれない、という対象者になると思います。または、Excel 機能で「スタイル→条件付き書式」の設定をすれば、数値の色を変えて表示は自由に設定できます。</p> <p>由田先生がご講義の中でもおっしゃっていた個別対応が必要な対象者をどのように絞るかについて、その条件は、個々の対象集団によって違ってくると思います。数値だけではなく、成長曲線を描いたり、食に関する健康問題を有していることが明らかかな子であったり、様々であることも抑えておかなければならないと存じます。</p>

<北出先生より この EER 算出表をご利用される皆様へ>

- ・身体活動レベルについては、2010年版のレベルⅡ(ふつう)を検索値として当てはめる関数が入っていますが、文部科学省が示した平成25年4月1日施行の「1.65」「1.70」を手入力してください。
- ・肥満度判定の表は修正が必要です。下記の通知文書で示されておりますのでご参照ください。
健が発0329第3号 平成25年3月29日 厚生労働省健康局がん対策・健康増進課長より
「特定給食施設における栄養管理に関する指導及び支援について」
→事務連絡として文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課より通知(平成25年9月6日付)

<12月>

受講者からの改善要望等	北出先生からのご回答
4年生の1日の活動量が30分以下から3時間と幅が広がったので、生活強度を個人ごとに打ち替えて計算した。個人ごとに数値を入れる場所があった方がよいのではないだろうか。	身体活動レベルの数値を直接入力しても、計算されますので個々の数値を入力してお試してください。

受講者からの改善要望等	北出先生からのご回答
<p>操作手順が複雑でわかりにくい部分があった。</p> <p>本校は特別支援学校で幼稚部があるので3歳から計算できるとうれしいです。</p>	<p>白いセルにデータを入力するだけの操作に作ったつもりですが、具体的にどの箇所がわかりにくかったでしょうか。ご教示いただければ検討いたします。</p> <p>3歳以上6歳未満の幼児は、肥満やせの評価方法が違いますので(H25年9月/厚労省/事務連絡/特定給食施設における栄養管理に関する指導・助言について)、参照するデータを変える必要があります。よって、別のファイルを作る必要があります。なお、同事務連絡には「身長別標準体重の早見表及び肥満度判定区分の簡易ソフトについては、平成25年度中に配布予定です。」と示されていますので、関係機関より最新情報入手され対応されては、と思います。由田先生が「栄養管理」の章を監修された石川県「保育所給食ガイドライン」(石川県HP/健康福祉部少子化対策監室(子育て支援担当)/同タイトルPDF)/第9章資料/P70)に具体的な計算方法が示されていますので、参考にさせていただきます。</p>

<12月>

受講者からの改善要望等	杉浦先生からのご回答
<p>個別指導(肥満)で活用しているが、成長曲線はきれいに出来大変良いと思います。複数人数一括入力の仕方がわからず困っています。教えてほしいです。</p>	<p>子どもの健康管理ユーティリティを使えば、この作業は簡単にできます。</p>
<p>子どもの食事支援で、個人データ(身長や体重)を入力したのですが、後日再度あけると、データが保存されません。(データ保存も押しました。どの行に入れても、一番目は消える)。</p>	<p>入力し直すか、プログラムを再コピーしてやり直してください。保存方法が誤っている可能性があります。マニュアルを参考に確認してください。</p>
<p>個人データの追加がよくわからない。一斉入力したいがうまくいかない。(ユーティリティ一括入力→日付順にならない)生年月日を入力したがデータが消える。クラス順に入力できるようにしたいと煩雑になる。</p>	<p>追加すべきデータのキーになる項目、「名前」、「生年月日」、「性別」が一致すれば、既存データにデータを追加することは、問題なくできます。これができないのは、どこかで操作を誤っているとしか考えられません。</p>

受講者からの改善要望等	杉浦先生からのご回答
<p>食事処方の「ごはん1杯」の重量設定が100gとなっていた。食品編集から重量を75、点数を1.25に変更し、1杯の設定を150gとしたが、この設定で合っているのか、確証が持てなかった。</p> <p>ごはん1杯の重量は年齢によって異なるので、ごはん〇gと表示される方が後で修正しやすく感じた。</p>	<p>本プログラムの食品構成は、糖尿病食品交換表の考え方(1単位=80kcal)に準じて作成されています。1単位=ごはん50gなので、1杯100g=2単位として計算しています。ごはん75g=1.5単位で、1.25単位の場合は$1.25 \times 50g = 62.5g$となります。したがって、ごはん150gの場合は3単位となります。ご飯の表示については個別編集できます。</p>

<8月>

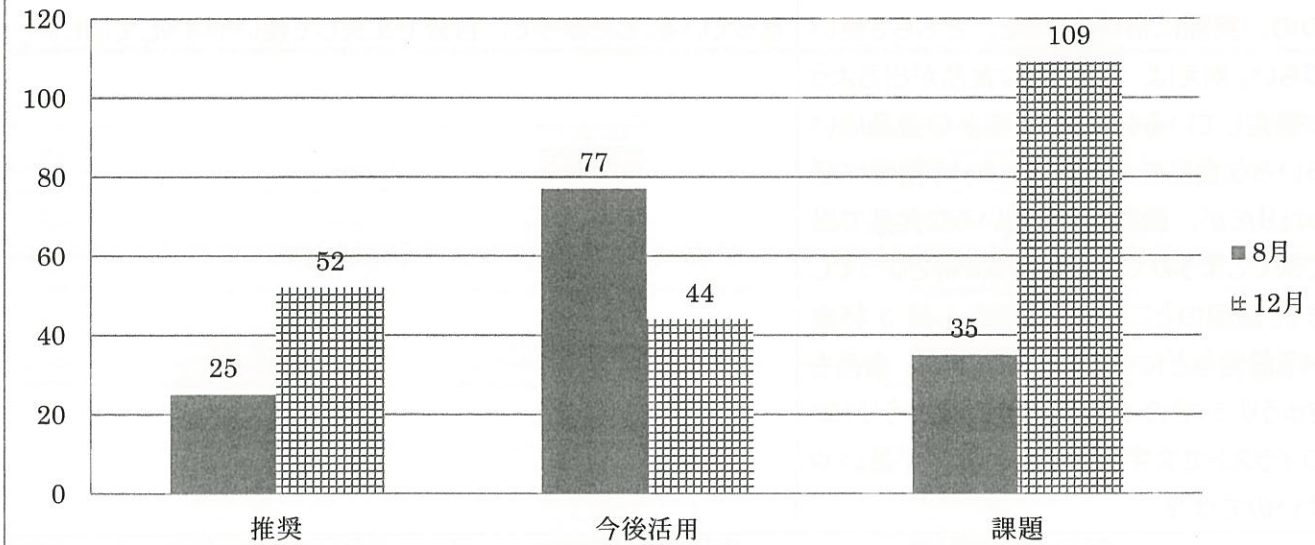
受講者からの改善要望等	村田先生からのご回答
<p>本校は特別支援学校の聾学校である。身体活動レベルは一般の学校に準ずると考えられるのでこのプログラムはそのまま使えると思うが、本校の場合、幼稚部もあるので、村田式の係数が使えない。村田式には、3~4歳の係数がないと思われる。</p>	<p>3-5歳についても対応しているので、検討してほしい。ここで村田の係数といっているのは肥満度計算用の係数のことではないかと思うが、これは確かに小さい年齢については出していない。その代わりに、3-5歳は厚生労働省の幼児身長体重曲線計算式から標準体重を計算して、肥満度を出している。</p>
<p>Macでのエクセル活用であるので、サンプル健康管理データなど、閲覧できないところもあった。WinでもMacでも閲覧できるように改善できるのであれば、お願いしたい。</p>	<p>マクロを使っているので、おなじMicrosoft Excelでも、現在の段階ではMacOfficeでは動かない。</p>
<p>肥満指導用として食事処方を出したかったが、食事処方は上限値があるようだ。(例:小5男子の場合3200Kcal上限)非常に体格の良い児童・生徒もいるため、もう少し、範囲の設定を広くしてほしい。(操作ミスだった場合はすみません。3200Kcal超で設定できるようであれば、方法を教えてください。)スポーツ栄養で活用する場合でも、体格・身体活動ともに高ければ、各年齢の上限を終える場合もあるのでは?(中学校相撲部等)</p>	<p>このプログラムは、相撲部部員のような特殊なスポーツをしている児童生徒は、対象にしていない。あくまでも、極一般的な生活をしている児童生徒が対象である。しかし、摂取エネルギー計算が適切である限り、摂取エネルギーの上限は設けていないはずなので、よく検討してほしい。</p>
<p>入力した児童・生徒の個人データすべてを入力しないと画面を閉じられないものがあった。途中でも保存できるとよいと思った。</p>	<p>個人データとして必須な項目が入力されない場合は、入力すること自体に意味がないので、警告がでることがある。たとえば計測年月日、身長か体重のどちらか(これはどちらか一方でよい)が、入力されていないと、入力すること自体に意味がないことになる。このような場合を除いて、ここで指摘されている状況が起こることはないと思っている。</p>

受講者からの改善要望等	村田先生からのご回答
<p>食事処方を作成したが、2 パターンであるものの、実際に指導となると、どちらも使いづらい。例えば、いろいろな食品が出るように設定しているものでは、ほかの食品はいろいろな食品をとりましょうという指導にぴったりだが、穀類までいろいろな食品で出て来てしまうので、ご飯が 0.5 杯となってしまふ。穀類のところは、ご飯を 1 日 3 杯食べる設定などにできるとよい。また、食品もきゅうり 5 本のイラストよりも、きゅうり 1 本のイラストで文字が 3 本などの方が使いやすいのでは？</p>	<p>この部分は、自分で使いやすい形に作り直すことができるようになっていて、したがって、自分で工夫して使いやすくしてほしい。</p>

<村田先生より 子どもの健康管理等をご利用される皆様へ>

このプロジェクトは身長体重成長曲線を描くことによって、適切な栄養摂取がなされていることを評価する目的で行っています。このプログラムを使って食事処方だけをするのは、このプロジェクトの主旨ではありません。端的に言えば、人間は野生の動物と同じですから、食事摂取量については、その許容範囲が大きいのです。何をどのくらい食べさせるかは、おおよその目安でよく、食べさせた結果がどうであったのかに力を注ぐべきです。

感想（人）



項目	主な内容
推奨 52人	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめて自分の学校のデータを見たときに、子どもの食べ具合について自分が感覚でとらえていたとおりだったのでおどろきました。やっぱりこのデータ入力は大切だと思いました。 ・本校の児童の体位に対する摂取基準を把握することができた。食べ残しが少ないことを良しとするのではなく、必要な量を提供できているか、子供たちの成長に合わせて常に確認していくことが大切だとわかった。
今後 44人	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちに自分に合ったエネルギー必要量があることを知らせることができた。今後は、「食事処方」も活用して個に応じた指導を行っていきたい。
課題 109人	<ul style="list-style-type: none"> 摂取基準 41人 <ul style="list-style-type: none"> ・所属校(中学校)のみ、9月の身長・体重のデータを入れました。1・2・3年で米の量を同じにしていることに疑問を持っていたので、変更する根拠の一つにできればいいかなと期待していましたが、3年生のデータを14歳とするか、15歳とするかで摂取基準に大きな差が生じ、数字だけでは根拠としての説得力に欠けるということを実感しました。 連携 41人 <ul style="list-style-type: none"> ・ご飯を配食するときの目安に、個人毎にご飯量写真カードを配布した。担任からはわかりやすいと好評だったが、肥満改善には至っていない。 時間 11人 <ul style="list-style-type: none"> ・時間をつくってしっかりプログラムと向き合い、給食管理や給食指導に活用できるようにしたいと思います。 操作 10人 <ul style="list-style-type: none"> ・自分がほしい情報は、どのプログラムを使えばいいのかわからず手が止まってしまう。この操作方法マニュアルとは別に活用パターン(簡単な活用の流れ)ができてくると初めてこのプログラムを手にした人も取りかかりやすくなるのではないかと思います。 データ 6人 <ul style="list-style-type: none"> ・他の学校からもデータをもらえるように校長先生の理解を得る必要があります。プライバシーもあるので、理解してもらえるようきちんと説明しなければと思います。 センター 5人 <ul style="list-style-type: none"> ・センター方式なので全児童、生徒のデータを集めるのが大変だと思う。 給食費 3人 <ul style="list-style-type: none"> ・摂取基準を個別利用するとき、やはり給食費の問題も出てくると思う。特に中学生の男女差は大きい。職員間で共通理解して個別指導に利用したいが難しいと感じている。 特別 2人 <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校なので、身体活動レベルがあきらかに違うと思われる子どもと筋緊張がある子どもについては担任と相談し係数を変えた。 その他 17人 <ul style="list-style-type: none"> ・このシステムを全国展開していくためには多くの栄養士に実践してもらわないといけないのですが、必要性を感じない栄養士も存在します。現在の食事摂取基準の正しい運用方法を再確認する必要性を感じます。

(考察)

受講者からは肯定的な感想が多く寄せられ、職務の中で「摂取基準算出」をはじめとしたプログラム活用の必要性を強く感じていることが分かった。

8月と12月の報告書を比較すると、12月は研修会受講後時間の経過と共に活用の幅が広がり、「推奨」または「今後活用したい」から「プログラム活用に当たっての課題」へと感想の移行がみられた。具体的には活用報告を寄せていただいた8月164人・12月215人の感想の記述をみても明らかになっている。このプログラムの活用を推奨する記述が8月には15.2%であったが12月には24.1%に上がっている。また、「今後活用したい」との記述が8月は47.0%であったが12月には20.5%に減り、実際にプログラムの使用が進んでいることが分かる。さらに学校給食における給食管理の課題がでてきた。8月には21.3%であった課題が12月には50.7%に増えた。それぞれの立場で活用したことによる課題意識が高まった。

そこで、以下のように課題の内容を分類した。

○摂取基準における課題 (41人)

数ヶ月で身長・体重共に成長する子どもたちに適切な栄養価の算出は容易ではないとの感想が多く寄せられたが、摂取基準の数値だけにとらわれず、子どもたちの実態を把握しての栄養管理が必要となる。

○連携 (14人)

活用の際して一人では判断できない事項もあり、市町村教委や地域の栄養教諭・栄養職員とも話し合っ行ってきたいのご意見をいただいた。市区町村教育委員会に働きかけて相談をしてみる、担任の先生や養護教諭を巻き込んで子どもの食事や成長のことを連携して進める、食事量などについて保護者の理解を得られるようにすることなど、関係者への発信を通して課題を解決していく必要があると考えられる。

○センターにおける課題 (5人)・データ (6人)

センターは給食喫食対象者が多く、全てのデータの入手や入力が増えることが課題となっている。データ入手困難という課題に対しては、平均値を活用して暫定的な摂取基準を求めることも1つの方法と考えられる。テキストには「平均値の活用」も記載されているので再度テキストを熟読していただきたい。

また、文部科学省の事務連絡(平成25年9月6日付)「特定給食施設における利用管理に関する指導及び支援について」を引用して、関係職員から理解を得ることでデータを共有することも大切である。

○給食費 (3人)

「個別に食事量を変える≠均一な給食費徴収」が課題となるのご意見があった。今後、給食費については、保護者や関係者の理解を得る必要がある。

○特別支援学校における摂取基準 (2人)

身体活動レベルが個々に明らかに異なることによる摂取基準運用に関する課題があるが、今後、文部科学省からの通知文も参考にしながら算出することが望まれる。

○操作 (10人) 時間 (11人) その他 (17人)

「プログラムの操作方法に手間取った」「日常業務の中で時間がない」「時間を作ってしっかりとプログラムと向き合いたい」「やる気次第」などの感想も寄せられた。

このプログラムを活用することで、『子どもの実態に即した給食管理および食に関する指導』を行うことができる。そのためには、このプログラムの操作方法を習得する必要があると考える。

スキルアップ研修会受講後の取り組み その①

市教育委員会の取り組み

新潟市・松山市・仙台市の教育委員会担当者からの質問について、由田先生にご指導をいただきました。

〈新潟市標準献立作成における学校給食摂取基準策定の考え方について〉

（市教育担当者）新潟市では、標準献立作成のために、保健係に提出してもらった保健統計のデータから新潟市の学校給食摂取基準を決めています。市内の児童生徒の男女別の平均身長から、標準体重を求め、文部科学省の示す身体活動レベルで計算をしています。

新潟市の児童生徒の身長は、全国平均より高いです。

計算式に当てはめて計算しますと、エネルギーが小：651kcal，中：832kcal となります。（別紙資料①）たんぱく質，脂肪は，エネルギーが決まることで決まります。食塩から食物繊維は文部科学省の値としています。（別紙資料②）

基本的にこのような考えで、新潟市の標準献立作成の摂取基準を策定ということで、間違っていないのでしょうか？

これを基に、標準献立を考えています。

各学校・給食センターには、それぞれの施設の実態に合わせた栄養管理をお願いしています。

新潟市の基準より摂取エネルギーが下回る場合は、主食等でエネルギーを減らす等の考えでいいのでしょうか？（委託炊飯の場合、10g単位でしか変更できない現状で困っています。）

→（由田先生）細かな関数のところは確認できていませんが、手順としてはよろしいと思います。ただし、ここで示された平均身長が4月に測定されたものでしたら、少なくとも学期ごとに成長を加味したエネルギー量を求めて、修正する必要があると思います。また、可能ならば学年ごともしくは、クラスごとに盛りつけ比率を示して配缶できると良いのですが…。当面は現状で可能なレベルでよいと思います。

それと、エネルギーの丸めは、一番最後の33%をかけたところでなさった方がよいと思いました。（既にそのようになっているのであれば問題ありません。）

基準を下回る場合は、主食で調整してもよいですが、10g単位でしか調整できないようでしたら、クラスごとの人数を調整して、実質的にトータルの数字を合わせるか、多少の残食を覚悟してお出しすることになるかと思います。

(由田先生) 新潟市さんは、センター方式がメインで、一部に自校方式が残っているのでしょうか？

→ (市教育担当者) 新潟市の状況については、学校給食センターが多いわけではありません。

自校給食方式

小学校：64校

中学校：9校 (内1校親子方式)

特別支援：2校

幼稚園：4園

学校給食センター方式

給食センター数：14センター

受配校数

小学校：49校

中学校：20校

幼稚園：8園

標準献立作成のために算出した新潟市の学校給食摂取基準を、それぞれの学校、給食センターの実態に合わせてどう運用していくかが課題です。

(市教育担当者) 平成26年度の新潟市の学校給食摂取基準を決める時期を迎え、食品構成を検討しています。

中学校の摂取基準が小学校に比べると、カルシウム、マグネシウム、レチノール当量が文部科学省の値が高く、献立作成する際困っています。

この数値を基準としなければならないのでしょうか？

→ (由田先生) カルシウム、マグネシウム、レチノール当量については、日常的に不足が心配される栄養素であることから、文部科学省の基準が高めに設定されています。市として実情に応じて若干低めに設定するのか、高め(文部科学省の値)に設定し実態としては下回るのだけれど、頑張ってお出ししているというような姿勢を示すのかの選択であろうと思います。

個人的には後者をおすすめ致します。例えば、33%のエネルギーでマグネシウムではRDAの50%を出すことはとても厳しいのですが、何でも実状に合わせるようにしてしまうと、そのうち全体がガタガタになってしまうことが危惧されます。また、食事摂取基準には、エネルギーと栄養素の優先順位が示されているのですから、上位から決めたとはっきり言えますので..。

平成26年度 新潟市学校摂取基準について(推定エネルギー必要量)

資料①

平成25年度新潟市学校保健統計より算出 (平均身長から標準体重)

小学校

学年	年	性別	標準体重	身体活動レベル	基礎代謝基準値	エネルギー蓄積量	I	II	III	文部科学省	推定エネルギー量	まるめエネルギー量	人数	学校給食摂取基準(33%)			
														1年平均	2年平均	3・4年平均	1・2年平均
1	6	男	21.6	4	44.3	15				1.65	1593.85	1600	3364	5361718.128	1年平均	1・2年平均	全校平均 651
	6	女	21.1	4	41.9	20				1.65	1478.75	1500	3278	4847337.583	507	538	
2	7	男	24.2	4	44.3	15				1.65	1783.9	1800	3423	6106286.277	2年平均	538	
	7	女	23.7	4	41.9	20				1.65	1658.5	1700	3196	5300564.402	569		
3	8	男	27.6	4	40.8	25				1.7	1939.34	1950	3381	6556895.016	3年平均	3・4年平均	
	8	女	26.9	4	38.3	25				1.7	1776.46	1800	3265	5800138.635	614		
4	9	男	30.8	4	40.8	25				1.7	2161.29	2200	3511	7588282.168	4年平均	652	
	9	女	30.6	4	38.3	25				1.7	2017.37	2050	3345	6748089.27	690		
5	10	男	34.6	4	37.4	35				1.7	2234.87	2250	3483	7784045.244	5年平均	5・6年平均	
	10	女	34.8	4	34.8	30				1.7	2088.77	2100	3366	7030793.088	714		
6	11	男	38.8	4	37.4	35				1.7	2501.9	2550	3664	9166976.256	6年平均	758	
	11	女	39.2	4	34.8	30				1.7	2349.07	2350	3462	8132487.264	801		
												40738	80423613.33				

中学校

学年	年	性別	平均体重	身体活動レベル	基礎代謝基準値	エネルギー蓄積量	I	II	III	文部科学省	推定エネルギー量	まるめエネルギー量	人数	学校給食摂取基準(33%)			
														1年平均	2年平均	3年平均	1・2年平均
1	12	男	44.4	4	31	20				1.7	2359.88	2400	3579	8446010.52	1年平均	1・2年平均	全校平均 832
	12	女	44.4	4	29.6	25				1.7	2259.21	2300	3313	7484756.104	763	832	
2	13	男	49.5	4	31	20				1.7	2628.65	2650	3583	9418452.95	2年平均	832	
	13	女	47.7	4	29.6	25				1.7	2425.26	2450	3405	8258023.92	835		
3	14	男	54.4	4	31	20				1.7	2886.88	2900	3644	10519790.72	3年平均	832	
	14	女	50	4	29.6	25				1.7	2541	2550	3476	8832516	897		
												21000	52959550.21				

小学校

区分	ビタミン												
	エネルギー-kcal	たんぱく質g	脂質g	食塩g	カルシウムmg	マグネシウムmg	鉄mg	亜鉛mg	A(μgRE)	B1(mg)	B2(mg)	C(mg)	食物繊維g
新潟市学校給食摂取基準 (範囲)	651	24	19.9	2.5未満	350	80	3	2	170	0.4	0.4	20	5
文部科学省基準(8～9歳) (範囲)	640	24	18～22	2.5未満	350	80	3	2	170	0.4	0.4	20	5
		20～33											
		18～32											

たんぱく質：推定必要量の15% 範囲(12～20%)
脂質：従来どおり総エネルギー摂取量の25～30%

中学校

区分	ビタミン												
	エネルギー-kcal	たんぱく質g	脂質g	食塩g	カルシウムmg	マグネシウムmg	鉄mg	亜鉛mg	A(μgRE)	B1(mg)	B2(mg)	C(mg)	食物繊維g
新潟市学校給食摂取基準 (範囲)	832	31	25.4	3未満	450	140	4	3	300	0.5	0.6	35	6.5
文部科学省基準(12～14歳) (範囲)	820	30	23～28	3未満	450	140	4	3	300	0.5	0.6	35	6.5
		25～42											
		25～40											

＜松山市における学校給食摂取基準の設定の手順について＞

(市教育担当者) 日本栄養士会の「EER 算出表 (学校給食) 2012 年 8 月版」エクセルソフトを使用して、本県・本市の学校給食摂取基準の設定を試行しているところではありますが、そのソフトを使用している中で、疑問点が出て参りました。しっかりと理解した上で、この学校給食摂取基準を設定したいと考えますので、疑問点についてご教授くださいますようお願い申し上げます。

まず一つ目の手順ポイントとして、「学校給食摂取基準を算出する時、データがどのように分布しているかをみるため、データの平均値のほかに、データのばらつきの範囲を示す散布度を示す標準偏差が用いられている」ということでよろしいでしょうか。

→ (由田先生) そのとおりです。

(市教育担当者) この標準偏差は、データの平均値との差 (偏差) の 2 乗を平均し、平方根をとり計算されているということです。つまり、平均値と標準偏差の値により、データの分布の広がり幅 (ばらつき) をみる尺度だと認識しています。

二つ目の手順ポイントとして、「ばらつきを考慮して、すごく離れた数値 (はみだした数値) を除き、再評価が行われる」ということでよろしいでしょうか。

→ (由田先生) すごく離れた数値 (個人) を特定して、個別対象者 (候補者) とするとともに、これらを除いて、再度評価を行うということです。

(市教育担当者) その再評価が行われる際に、配布されているエクセルの算出式では、その範囲を設定する規準を中央値におき、「中央値±標準偏差×2」の範囲以外の数値をはみ出した数値として除かれています。なぜ「平均値±標準偏差×2」ではなく、中央値を基準として範囲が設定されているのでしょうか。

「その範囲 (どのくらい除くか) を算出するために標準偏差を用いているのであって、あくまでも中央値を基準として、離れた数値を除く」という考え方ということでしょうか。

→ (由田先生) この部分はいくつかの考え方があります。教科書的には、「平均値±標準偏差×2」の範囲外を除外して、再度、平均値を求める形がすっきりすると思います。一方で、集団の分布に偏りが認められる場合、比較的人数の少ない集団で数名の数値が「±標準偏差×2」に近い部分にあった場合などは、平均値は必ずしも、集団の真ん中には位置しなくなることもあります。そこで、現在のワークシート上では、中央値を用いています。中央値は、平均値のように引っ張られることはあまりありません。

(市教育担当者) 三つ目の手順ポイントとして、「はみ出した数値を除いた範囲の中で、最終の中央値を基準とする。」ということでもよろしかったでしょうか。そこで、『平均値から算出された標準偏

差の値を使用し、「中央値を基準として範囲を設定」し、『最終的にもその中央値を求めるというところに疑問を抱き、理解することが困難となりました。一応、『「平均値を基準として範囲を設定」し、中央値を求める方法と両方で算出した』数値を比較してみました。それほど誤差はありませんでした。

- (由田先生) 試された集団データの人数が、どの程度であったのかは、わかりませんが、集団の規模が大きい場合や正規分布が認められる集団では、平均値で計算しても、中央値で計算しても、差はほとんど出てこないと思います。何れの方法も一長一短があります。ですので、今回なされたように、いくつか試してみられ、最も対応しやすい方法で給与エネルギー目標量を設定していただければよいと考えています。
- (北出先生追記) 学校現場において、これら数値をどのように活用するか、について追記させていただきます。「中央値」はその対象集団の基準値(文部科学省の基準と比較してみる)値、「中央値±標準偏差×2」の数値は、その値の幅に収まっている対象者数の割合がどれくらいかを確認する指標だと捉えています。例えば私の所属中学校(250名)で、4月は文部科学省基準840kcalに対し、本校は800kcalでした。そこで、献立作成の時点で、月平均を800kcalと設定し、1人当たりの米の量をこれまで110g設定だったところ、95g~100g設定にしました。分布はかなり正規分布に近い形のグラフになり、60%がその範囲にいました。そこで、学校給食の配分を主食の量でコントロールする(大盛20%、普通60%、小盛20%といったような・・・)というふうに対応しました。一方、小規模小学校で1年生学級10名程度、男女比8:2、体位は小学校3年生ほどの大きな児童が4人、といった状況でした。この場合、明らかに平均値と中央値では大きな差があり、同学校の3年生と比較し、1年生学級のほうが多く配分する必要性がありました。また、その小学校の全学年の分布のグラフは数値の大きいほうに偏っていたため、主食の量の設定を文部科学省の基準と比較で多めの設定としました。町全体の給与栄養量の目標設定のための算出であれば、対象者数が大きいので平均値と中央値の誤差は10kcal未満でした。これは、平均値で算出でもよいのではないかと考えております。最終的に、これらの数値をどのように活用するのか、その目的を明らかにして対応していくことが重要である、と理解しています。
- (由田先生) お手元のワークシート(日本栄養士会の「EER算出表(学校給食)2012年8月版」エクセルソフト)は完成版ではありません。現在、他地域の先生方からも、実際に使っていただき、ご意見をいただいております。これらを集約して、現在の仕様をよりわかりやすく、使いやすいものに改めることになっております。
- (北出先生追記) このワークシートは、文部科学省が「学校給食実施基準の一部改正について(通知)」を施行する以前に作成しております。加えて、平成25年9月に文部科学省事務連絡「特定給食施設における栄養管理に関する指導及び支援について」の内容にも対応していく必要がございます。今後、日本栄養士会で集約していただいたみなさまの貴重なご意見を反映し、ワークシートを作り上げていく予定だと聞いております。ご理解くださいませ。

<仙台市における学校給食摂取基準策定委員会開催と実施，検討について>

仙台市学校給食摂取基準策定委員会を開催し下記について実施，検討した。

【平成 25 年度】

- 策定委員は小学校 6 校，中学校 1 校，特別支援学校 1 校，給食センター1 施設の栄養教諭・栄養職員と教育委員会職員 9 名。
- 活用プログラムについて
摂取基準算出
(第 1 回目の活用報告書を基に身体活動レベルについては小 1・2 年生：1. 65，小 3・4 年生：1. 7，小 5・6 年生 1. 7，中 1～3 年生：1. 7 とし手入力し，肥満及びやせの評価について訂正)
- プログラム活用対象
 - ・策定委員の小中学校，給食センター対象校の中中学校。
小学校 1～2 年，3～4 年，5～6 年，中学校 1，2，3 年生について算出。
 - ・4 月のデータをそれぞれ入力（身長・体重）
4 月の献立作成時は測定前のため，平成 24 年度と平成 25 年度のデータを入力し比較した。
 - ・生年月日のデータがないファイルのため，4 月 1 日の満年齢で入力。（1 年生：6 歳，2 年生：7 歳，3 年生：8 歳，4 年生：9 歳，5 年生：10 歳，6 年生：11 歳，中学 1～3 年生は 11 歳・12 歳・13 歳）

【平成 26 年度】

- 活用状況
平成 26 年度 4 月の献立作成に活用できるよう，策定委員の学校・給食センター以外の摂取基準を算出する予定。
たんぱく質及び脂肪エネルギー量についても算出する予定。
- その他疑問点など
(市教育担当者) 正規分布していない，ばらつきが多い時どのように考えたらよいか。

→ (由田先生) まずは，代表値（平均値，中央値など）を求めて，仮にその値で給与エネルギー目標量を設定した場合に，どの程度±10%を外れる対象者が出てくるのか確認してください。外れた対象者を除外したうえで，再度代表値を求め，給与エネルギー目標量とすればよいです。なお，除外した対象者については，次項のような個別対応者として位置づけてください。

(市教育担当者) 身長が高いと除外されるが，どのように考えたらよいか。

→ (由田先生) 除外された対象者には，個別対応が必要であると判断していただき，おかわりや減量した盛りつけ等の指導を行って，できるだけ望ましい摂取量となるようにご配慮いただきたいと思います。

(市教育担当者) 身長体重の測定のデータについて、4月分は教育委員会に提出(7月末)のため全校把握可能だが、健康診断回数は学校により異なるため、後半の実態把握が難しい。4月のデータで1年間使用することになるが、そのような運用でよいか。

→(由田先生) 児童・生徒は、僅か数か月でもかなりの成長が見られるため、4月のデータから求めた給与エネルギー目標量をそのまま使い続けることは問題が多いと予想されます。

これらへの対応策としては、過去数年のデータを蓄積・確認することで、学年・性別における1年間の平均的な身長の伸びが求められますので、この値を勘案して、4月のデータに上乘せしながら、給与エネルギー目標量を設定(例えば、2学期(9~12月)、3学期(1~3月))することが望ましいと考えます。

(市教育担当者) 給食センターの場合献立作成時期が早いため、実際に喫食する児童生徒の測定結果を摂取基準に反映するのは難しい。前年のデータを活用し運用してもよいか。他市町村の給食センターではどのように活用しているか。

→(由田先生) 前項に示したような対応であれば、多少のタイムラグは生じても、適切な対応ができるのではないかと考えられます。

(市教育担当者) 特別支援学校でデータを入力した。児童の6割が標準となり再評価しエネルギーを算出したが、本校の摂取基準としてよいのか。生活活動強度の設定や実際に提供する際にどのように個人差をつければよいか難しい。

→(由田先生) 特別支援学校に通う児童・生徒は、個体差が大きく、いわゆる一般健常者と同等に扱えない場合が多いと考えられます。このため、医学的な観点からの評価も必要となります。各児童・生徒の主治医、保護者などと連絡を取り合いながら、普通の体格(肥満度±20%以内)を維持できる給与エネルギー量を個別に設定することが望ましいと思います。

(市教育担当者) 委託炊飯校は主食量でのエネルギー調整が難しい。ただし、一律にはあるが前期・後期で主食量を変える予定で現在検討しているが、そのような運用でよいか。(学校ごとの対応は困難なため)

→(由田先生) やむを得ないと思いますが、具体的な量を設定する際に、できるだけ児童・生徒の実態に合うような配慮を加味していただきたいと思います。

スキルアップ研修会受講後の取り組み その②

医療との連携

ワーキンググループでは、医療機関でどのように肥満児指導が行われているか、また、学校・病院間でどのような連携がとれるかを検証する必要があると考えました。

そこで、受講者の病院勤務管理栄養士新宅氏が、実際に病院での指導実績が豊富な杉浦先生と直接対談を行うことをご指導いただきました。

＜杉浦先生（プログラム開発者）と新宅氏（病院勤務）の対談＞

1. 自己紹介

杉浦：和洋女子大学と病院小児科に勤務をしています。「子ども食事指導・支援プログラム」ワーキンググループの協力者として、こちらのプログラムを提供させていただきました。

新宅：東京都・病院小児科外来で指導をしています。病院側と学校側との肥満指導の提示資料に差があってはいけないと考え、また学校がどのような指導をしているのか知りたくて研修会に参加しました。

2. 対談記録（抜粋）

司会：新宅先生からはプログラム活用の実践例について、杉浦先生からこのプログラムのさらなる活用方法を通じて対談を進めていきます。

新宅先生より、活用事例の詳細を教えてください。

新宅：病院では、食事バランスガイドを用いた食事指導を進めましたが、少し難しかったようです。対象児童は、学校の健診結果をもとに10歳の時に受診し、中学受験前まで計7回の栄養相談を通して食事バランスが少し変わってきました。

祖父が糖尿病、日々のジュース摂取量が多い、外食（ファストフード）が多い、おやつが多いという習慣があり、計画として1食600kcal、おやつ200kcal、1日合計2000kcalと設定し、食事をコントロールすること、運動をしていくことを決めていきました。

5回目の来院時、祖母が、対象児童が成長期であるにもかかわらず、以前よりも食事が減っていることを心配され、「実際に成長をしているのか？」という質問を受けました。成長曲線を使って、曲線に沿って成長ができているとの説明をしましたが、うまく伝わりませんでした。その後、この事例を振り返ってプログラムを使ってみたところ、容易に経時的な成長曲線を描くことができたこと、食事が適正で、身長が伸びていることが解りやすく示されたので、今後はプログラムを是非使いたいです。

杉浦：こちらの事例の場合、エネルギー必要量は、実測体重を使って求めます。負荷エネルギーは肥満度別に設定してあるので、体重を1～3ヶ月かけて減量するためのエネルギーを計算しています。それを引いたものを個人に合わせて提示します。

この症例の場合、エネルギー必要量3153kcal－負荷エネルギー量480kcal＝約2600kcalを目標エネルギーとします。この数値で体重を減らすための食品構成になっているので、個人差がありますが、計算上ではこれだけ食べていけば体重が減る量であることを説明します。

次の指導でも食事処方はまだ出さず、普通の食事をしている中で、ジュースの代わりにお茶や水やカロリーオフ飲料にしましょうと指導をします。

それで様子を見てその後の体重が変わらない場合は、食事処方の指導はしていません。

それは子どものモチベーションを考慮し、食べる内容、食べる習慣など個に応じた指導をしていき

たいからです。

指導が継続された場合で、ジュースを飲まず体重が減った場合はそれを続けること、その後に次にすることを一緒に考えていきます。

例えば、運動しましょう、野菜を食べましょう、体重を測りましょう・・・などへ意識がいきます。成長曲線のデータは毎回入力して確認をしていますが、指導の際に、食事処方を毎回行うことはしていません。食事バランスが悪い場合、例えば肉が過多の方にはバランスが大事なことを示す方法として食事処方を示します。制限をしている食事処方ではありますが、「食べてはいけないと言われると思ったがこんなに食べてよいのか？」と言われることが多いです。

いくら言われても、きちんと食べられる訳ではないです。自分でコントロールしていく、食べ方によって変えていくことが大事です。

司会：プログラムを活用し、学校給食食事摂取基準から外れた人は個別指導のポイントはどうしたらよいですか？

杉浦：個別指導の対象となる基準から外れる子ども達に対しては、給食量が均等割りではなく体格に合わせた食事量が提供されているのでしょうか。このプログラムは、食事の計算をするためのものではなくて、例えば成長曲線を見て体重の増加が極端に増えているとか、食事食べても体重が増えないということを見つけるツールとし指導を行って欲しいです。

プログラムを活用していただければ、適正な給食の食事量を計算できるため、給食の食べ方を指導する手立てになります。

そのためにも、同じ考え方で進めていくワーキンググループでされている内容はとても大事だと思います。

司会：杉浦先生のお考えになられる活用のメリットをお聞かせください。

杉浦：食事プログラムのメリットは、成長曲線で使ったデータをコピーして活用できることです。

食事摂取基準の考え方が広まってきたので、和洋女子大学で使用していたプログラムを村田先生とご相談してこのプログラムを作成したところ、同じデータベース活用で成長曲線が描けるようになり、さらにメタボの診断ができるプログラムもできました。

文科省事務連絡平成25年9月6日「特定給食施設における栄養管理に関する指導及び支援等について」が、平成26年度以降には周知されて、個別指導が進められる通達が出ると聞いています。この通知を知らないままで給食管理を進めないようにしていただきたいです。

司会：以前は摂取量の考え方だったので、盛り付けは等分でした。今後は食事摂取基準なので、指導する教諭は頭の切り替えが必要です。

平成26年度は実務的な内容を含めた研修会を計画しています。

先程、病院と学校の栄養士との連携方法は、同じ手法を使って栄養の指導を進めていくとよいとのご提案をいただきました。

杉浦：小児科医の先生方も、肥満度と成長曲線は使用されています。

EERの計算は食事摂取基準をスタンダードのものとし、体重を減らすための食品構成を出す基準は食事摂取基準ではないので、そこは評価をしてみてもいいと思います。

司会：保護者と子どものためには、提示される資料が学校と医療機関で同じものを使って指導がすすめられるとよいでしょう。

杉浦：大人の場合はあるが、小児肥満の食事に関する基準が出ていません。そのため、色々なやり方がされています。食事の基準のガイドライン、全国的なツールがないのです。こういった活動が広まり基準ができればよいと思っています。

司会：まずは、栄養教諭・栄養職員がデータを入手して成長曲線を確認し学校内の共通理解を図り、栄養教諭・栄養職員から保護者へ伝え医療機関へ繋げていくことが望ましいでしょう。

もっとこのプログラムの活用を広めて、次の段階にいき大きなうねりを作っていきたいと思えます。

本日は、杉浦先生、新宅先生より、貴重なご意見や新たな課題をいただくことができました。

今後もよろしく願いいたします。

一同：ありがとうございました。

スキルアップ研修会受講後の取り組み その③

＜参加企業（賛助会員）からの手紙＞

過日の研修会では、充実したプログラムに参加させていただき、誠にありがとうございました。

学校給食摂取基準については、個別指導の手立てとなる、身長と年齢・学年の考え方とその測定時期、算出方法を非常にくわしく解説していただき、大変感謝しております。

今回は、学校給食の現状を学び、「成長過程の子どもたちひとりひとりを個別にみていく」「三食の中の一食としての給食」など、成長と栄養摂取の関連について、視点を変えて考えるよい機会となりました。

中略

そのために、学校給食の現状を把握し、受講する子どもたちを理解することはとても大切だと考え、今回の研修に参加させていただきました。

今回の研修では、給食管理の現場で日々ご活躍の皆様の熱気に囲まれ、真剣に講義を受けたことで、お申し込みをさせていただいた時点の予想をはるかに上回る、実際の勉強ができました。

ありがとうございました。

研修会参加の企業 広報課 管理栄養士の方より

今後の展開

(公社)日本栄養士会学校健康教育事業部では、平成 25 年度『給食管理のためのスキルアップ研修会』～子どもの栄養食事指導・支援プログラムを活用して～を全国 7 か所で実施した。

「日本人の食事摂取基準(2005年版)」が提示されたことにより、個に応じた給食の提供を行う必要が出てきたことから「学校給食における食事摂取基準」の活用について理解を深めたいという声が多く、研修会への参加者は全国で 583 人だった。

研修会参加者には、配布プログラム活用状況についての報告を 8 月と 12 月の年 2 回提出をお願いした。報告書から、このプログラムを活用し児童生徒の健康課題を明らかにするとともに学校関係者や保護者と共通理解を持つことで、子どもの健康・保持増進を図ることが重要であることを実証することができた。

また、このプログラムを推進していくための疑問・要望については、協力者の先生方からご指導いただいた。さらに、新潟市・松山市・仙台市教育委員会では「学校給食摂取基準の策定を行う取り組み」について、状況や実情を報告いただくとともに、疑問点については由田先生にご指導いただいた。

平成 26 年度も引き続き、『スキルアップ研修会Ⅱ-①』～子どもの栄養食事指導・支援プログラムを活用して(復習編)～を予定している。

来年度新たに、下記の研修も計画している。

- 個別指導推進のため「子どもの栄養食事指導・支援プログラム」の活用(応用編)
 - ・身体測定の結果から、成長曲線を活用して個別指導を行うための手順
- 「子どもの栄養食事指導・支援プログラム」の操作方法(実技・演習)
 - ・パソコン操作マニュアルを活用しての演習
- 学校給食における食事摂取基準を基にした食品構成作成について など

今後は個別指導の充実を目指し、さらに献立作成における食品構成の作成にもつなげていきたい。そのために、『子どもの栄養食事指導・支援プログラム』の改訂版の作成に村田先生・杉浦先生・北出先生が取り組んでくださっているところである。平成 26 年度の研修会も、多くの栄養教諭・栄養職員が参加することを期待したい。

当研修会で配布した『子どもの食事指導・支援プログラム』資料 CD は、研修中にご案内したとおり複製禁止です。なお、当資料 CD に不具合が生じた場合は、
(公社)日本栄養士会学校健康教育事業部担当 (Tel 03-3295-5151/FAX 03-3295-5165) へ
ご相談ください。

平成 25 年度学校健康教育事業部

給食管理のためのスキルアップ研修会

〈子どもの食事指導・支援プログラム 活用報告書〉

発行：公益社団法人 日本栄養士会 学校健康教育事業部
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-39
TEL.03-3295-5151 FAX.03-3295-5165
URL. <http://www.dietitian.or.jp/>

発行日：平成 26 年 3 月 31 日
